

## CAF賞 2023 入選作品展覧会

Contemporary Art Foundation Award 2023

「CAF賞」は、学生の創作活動の支援と日本の現代芸術の振興を目的に開催し、日本全国の高校・大学・大学院・専門学校の学生、および日本国籍を有し海外の教育機関に在籍する学生の作品を対象としたアートワードで、今年で10回目を迎えます。

この度、「CAF賞2023入選作品展覧会」を、12月12日～12月17日の6日間、東京・代官山のヒルサイドフォーラムにて開催いたしました。

公益財団法人 現代芸術振興財団

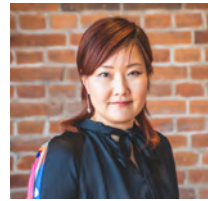
#### - 現代芸術振興財団について

公益財団法人現代芸術振興財団は2012年に設立されました。展覧会事業を通して人々が現代アートに親しむことのできる環境をつくること、表彰事業を通して未来へ文化をつなぐアーティストの活躍の機会を増やすことを目的に活動をしています。

#### - 設立者・前澤友作について

1975年千葉県生まれ。早稲田実業学校卒業後、バンド活動の一環で渡米。帰国後、1998年に輸入CD・レコードのカatalog販売を手がける有限会社スタート・トゥデイを立ち上げ、2004年、ファッションを中心としたインターネットショッピングサイト「Zozotown(ゾゾタウン)」を開設。2012年、2月に東証一部上場(3092)。同年11月に現代芸術振興財団を設立、現代芸術を中心としたアートコレクターであるとともに、若手アーティストの支援に力を注いでいます。

## － 審査員



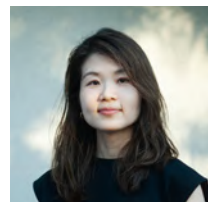
木村 絵理子 | 弘前れんが倉庫美術館副館長兼学芸統括 |

2023年より現職。2000年より横浜美術館に勤務、2012年より主任学芸員。2005年展から横浜トリエンナーレに携わり、2020年展では企画統括を務める。近年の主な展覧会企画に、“HANRAN:20th-Century Japanese Photography”(National Gallery of Canada、2019)、「昭和の肖像:写真でたどる『昭和』の人と歴史」(横浜美術館、2017／アーツ前橋、2018)、「BODY/PLAY/POLITICS」(2016)、「蔡國強:帰去来」(2015)、「奈良美智:君や 僕に ちょっと似ている」展(横浜美術館、青森県立美術館、熊本市現代美術館、2012)、「高嶺格:とおくてよくみえない」展(横浜美術館、広島市現代美術館、IKON Gallery、鹿児島県霧島アートの森、2011)、「束芋:断面の世代」展(横浜美術館、国立国際美術館、2009-10)ほか。この他、關渡ビエンナーレ・ゲストキュレーター(2008、台北)、釜山Sea Art Festivalコミッショナー(2011)など。



白石 正美 | SCAI THE BATHHOUSE |

1948年東京生まれ。株式会社スカイザバスハウス 代表。1972年よりフジテレビギャラリーを経て、89年に白石コンテンポラリーアートを設立。89年より3年間、東高現代美術館副館長を歴任。現代美術を軸とし、ファッション、建築など多岐にわたる展覧会を開催。92年には、日本初の国際アートフェア「NICAF」の総合プロデュースを手掛ける。93年、台東区谷中に銭湯を改装したギャラリースペース「SCAI THE BATHHOUSE」を開設。以後李禹煥、中西夏之、遠藤利克、宮島達男、森万里子など日本を代表する多くのアーティストの評価を固めると同時に、名和晃平等の次世代作家を世界に向けて発信。近年、「SCAI PARK」(北品川)、「Komagome Soko」(駒込)、「SCAI PIRAMIDE」(六本木)を開設して新たな視点にて展覧会を開催している。



野路 千晶 | Tokyo Art Beat 編集長 |

1984年広島県生まれ。NTTインターコミュニケーション・センター[ICC]、フリーランスのアートコーディネーター、ライター、ウェブ版「美術手帖」を経て、2019年末より現職。取材や記事の執筆、レクチャーなどを行う。



榎田 倫広 | 東京国立近代美術館 主任研究員 |

1982年東京都生まれ。担当した主な展覧会に「ゲルハルト・リヒター展」(2022)、「ピーター・ドイグ展」(2020)、「アジアにめざめたら:アートが変わる、世界が変わる1960-1990年代」(共同キュレーション、東京国立近代美術館、韓国国立現代美術館、ナショナル・ギャラリー・シンガポール、2018-2019)、「No Museum, No Life?—これからの美術館事典国立美術館コレクションによる展覧会」(共同キュレーション、2015)など。



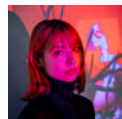
## 最優秀賞

### 菅野 歩美 Ayumi KANNO

東京藝術大学大学院

#### 明日のハロウィン都市

2023 ミクストメディア サイズ可変



› website



都市開発において、その計画にとって価値を持たないゴーストたちの居場所は、ほとんど無くなってしまふ。その居場所が取り戻されるには、どのような可能性があるのだろうか。

この映像では、「渋谷ハロウィンが伝承となった未来の渋谷」が映し出されている。かつてスクランブル交差点であった場所は、古代のように再び水で満たされている。そのことによって、土地は成長一辺倒の都市開発から解放され、かつての開発において排除されてきたものたちが、戻ってきている。街の中でうごめくこれらのものたちには、障害物を避けて歩く設定がそれぞれ施されている。はじめは順調に徘徊しているが、次第に同じ場所に溜まりだす。システム上のエラーから生まれたこの光景は、ゴーストたちが輪になって楽しく踊っているようにも見える。このありえるかもしれない渋谷は、都市と制御不可能な力が不可分であることを教えてくれる。そのことがわかった途端、現実の渋谷に潜むゴーストたちの姿が見えてくるはずだ。その力とどう付き合っていくのかは、今の私たちにとって無縁の問題ではない。



#### 審査員講評

本作のモチーフである「渋谷のハロウィン」は、東京出身・在住ではあっても、菅野の生活圏からは遠い存在であるという。近いけれど遠くもあるトピックに対して、菅野は街の構造や祭りの歴史を紐解いて、未来の人間から見た人類学的・考古学的遺物として現代の渋谷にアプローチしようとする。その手法もまた、CGと手描きのドローイングの間を何度も行き来しながらアナログとヴァーチャルな世界の間に一貫性を持たせようという試みだ。作品のモチーフを見つけて、そこにどうやってアプローチしていくのか、その手法はアーティストによってさまざまであるが、この先長く年月をアーティストとして活動していく上で、パーソナルな視点から一旦距離を置いて、社会的によく知られた時事的なトピックや、コミュニティに共有の課題に対して、俯瞰的な視点でアプローチする力を持っているという点を評価したい。最優秀賞の副賞として開催する来年の個展では、スケール感のある展示になることを期待したい。(木村)

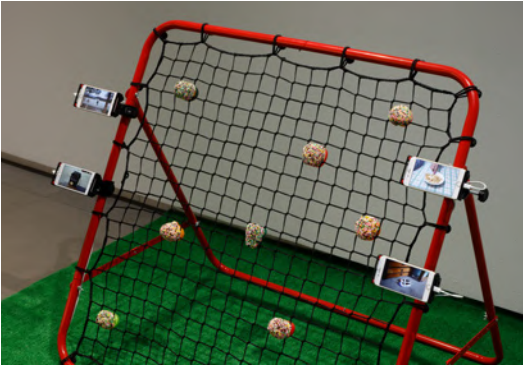


優秀賞

遠藤 梨夏 Rika ENDO  
佐賀大学大学院

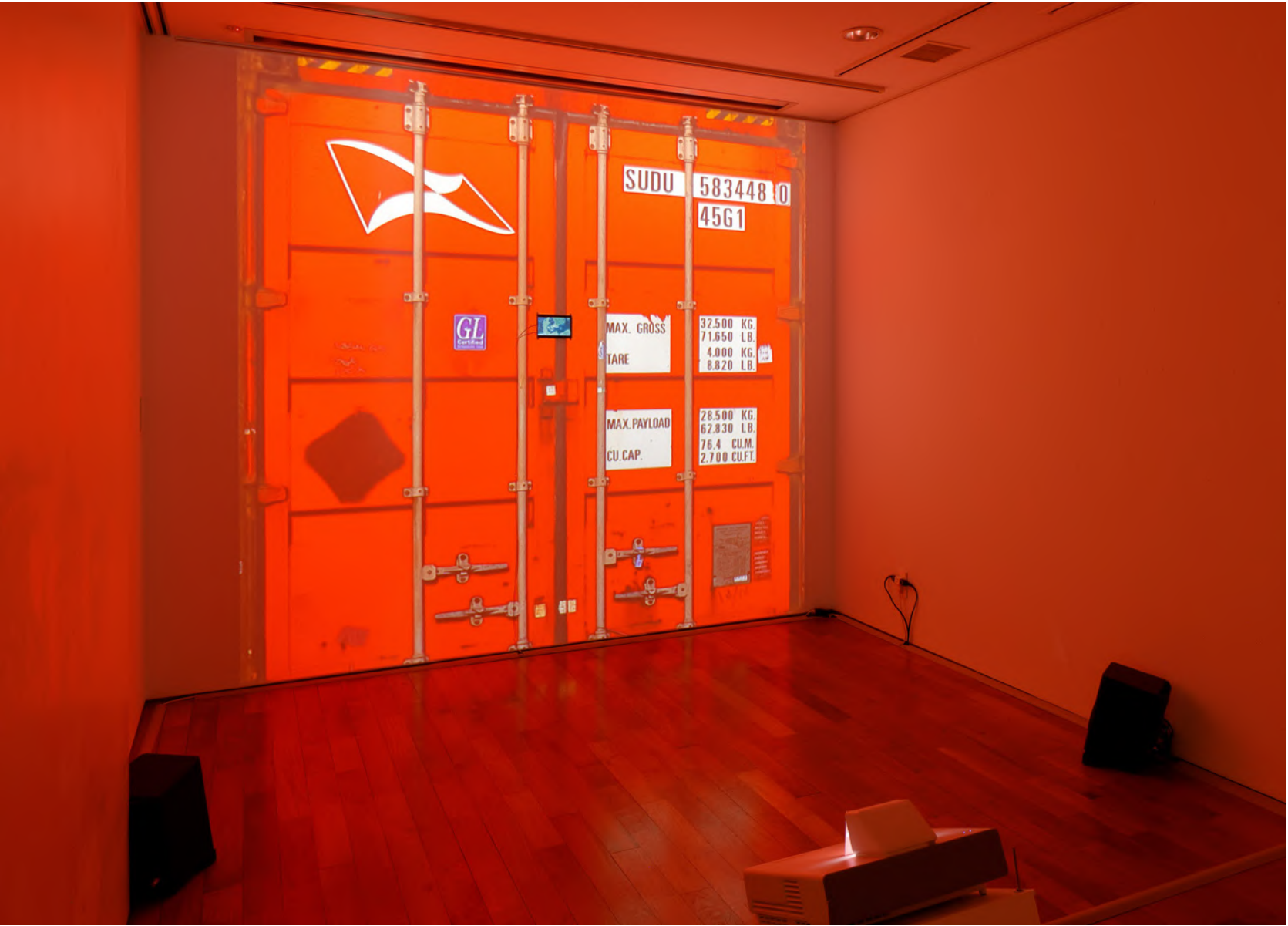
ほぐし水の三重点でピボット  
2023 ミクストメディア サイズ可変

本作品はメントスコーラ、野球、バスケットボールを主な題材としたインスタレーションである。メントスコーラはコーラにメントスを入れた時に勢いよく泡が吹き出してくる現象のことで、YouTubeなどのネット上に公開されたいたずら動画が起源である。今回は過去の記憶と、自分自身の性別を自覚せざるを得ない状況で印象に残っていたものをメントスコーラのモチーフにした。例えば、ランドセルや上靴の色やスポーツなど。個人的な事象と社会的に浸透しているメントスコーラを結びつけて映像を制作した。



審査員講評

どう受け止めたら良いのかわからないほどに、作品の中に要素が数多くある。この一つ一つが今はまだ完成されきっていないが、遠藤がこれからさまざまな場所に出向き見聞きしていくことで作品が修練されていく期待がある。これからも作品を作り続けてほしい。(白石)



木村絵理子審査員賞

鈴木 創大 Sota SUZUKI  
東京藝術大学大学院

GATE  
2023 インスタレーション  
サイズ可変



横浜港には、世界中から物資がコンテナに積まれ輸入されている。本牧埠頭にあるコンテナの背扉の写真を撮影し、その情報からコンテナの所有地域をつきとめた。コンテナの背扉のイメージが投影されている部屋では、それぞれのコンテナの所有地域のリアルタイムのラジオやライブカメラの映像が流れている。実感のないまま、私たちの生活に深く関わっているグローバリゼーションや同時代の場所性について惑星的視座から思考する。

審査員講評

横浜の港に到着する実際のコンテナを撮影した作品でありながら、特定の港に固有の歴史に依拠するのではない普遍性のある作品だ。世界中を巡ってたまたま同時に集まったリアルな存在としてのコンテナと、いつでもリアルタイムで世界中に繋がることのできるオンライン上の監視映像やインターネット・ラジオとの組み合わせが、現代の鑑賞者にとってのリアリティに直結する。ある土地の固有性や当事者性を重視する現代美術の傾向を軽やかに裏切りつつ、ヴァーチャルな世界や遠隔でつながる土地にも共鳴できるようになった私たちの世界観を表現した作品である。(木村)







## 白石正美審査員賞

堀内 悠希 Yuuki HORIUCHI

スレード美術学校大学院



> website



## Candle Flames

2023 ダンボール箱、映像(16mmカラーリバーサルフィルムで多重露光を用いて撮影したものをデジタルプロジェクターで投影) サイズ可変

16mmカラーリバーサルフィルムによって撮影された蠟燭の映像が紙製の箱の中に投影されています。蠟燭から別の蠟燭へと火を移そうとする映像ですが、実は多重露光により別々に撮影されているため、炎が移ることはありません。フィルムという特殊な物質の上に、実際には起こらない時間の重なりや超越を記そうとする試みです。また、映像の起源とされる洞窟の中の炎と影、蠟燭や暖炉、箱型のテレビ、そして16mmフィルムが最後に燃えるようにホワイトアウトする様子など、映像のルーツや特性を参照して紙箱への投影をしています。

## Shadow of Candle

2022-2023 セラミック、磁器 サイズは一点ごとに異なる

燃え尽きないろうそく。ろうそくは灯りであると同時に、燃えていくため時間を象徴する。セラミックとは1260°Cの釜で土を焼くことで、二度と土に戻らないようにする作業だ。半永久不滅の物体。影はこんなにも存在感があるのに物質として存在しない、炎もそう。彫刻にとっての台座やスタンドは逆に、存在するにも関わらず無いように扱われる。影と光に存在を与え、熱によって時間を凍結する。

## 審査員講評

段ボールと蠟燭と影など、思いもつかないテーマや組み合わせで作品を作っている。ダンボールが台座の役割をしていたり、影とその実体をセラミックで表現したり、アンバランスで完成されていない部分が多いが、素材やモチーフの選び方が面白い。これからどのような作家になっていくのか期待を込めて本賞を贈る。(白石)



野路千晶審査員賞

清水 冴 Sae SHIMIZU

金沢美術工芸大学大学院

Stitch Your Name

2022 参加者の刺繍、刺繍道具、映像  
サイズ可変

自己と他者の差異をわち合い、この社会に生きるすべての人間の尊厳を確立するために、アートに何ができるのだろうか？この問いを起点とする《Stitch Your Name》は、「刺繍」をめぐる美術史・社会的位置付けを再構築し、多様な「他者」を想像するためのアート・プラクティスである。参加者は自分の名前を刺繍しながら、その名前にまつわる物語を語る。名前とは、個人のアイデンティティやルーツ＝人種、民族、ジェンダー、階級、宗教などを象徴するものであり、そこには親密な物語が存在する。また「縫う」という反復的なジェスチャーは、私たちの思考を深め、思いを紡ぐことを可能にする。ほどかれた記憶の糸で名前を綴り、そこから対話が生まれるとき、私たちのほつれを縫いなおすことができるかもしれない。



審査員講評

不安定な世界情勢が続く個人の命や尊厳が軽視される出来事が続くなかで、本作が持つ平和的な強さに惹かれた。作品内では、参加者が自分の名前について語ることで自身の輪郭をなぞり直し、参加者が気恥ずかしさと晴れがましさが共存するような表情で互いを理解しあうような無防備な光景を見ることができる。一見するとシンプルな行為だが、名前を語る手段がこれまで女性中心の営みとされていた刺繍(手芸)ということ、実践の場が国内外の複数の場所であることなどから、閉ざされた行為・事柄を外へと開き、新たなかたちで結び直すことに対する作家の意志が感じ取れた。(野路)





梶田倫広審査員賞

藤瀬 朱里 Akari FUJISE  
東京藝術大学大学院

Where the kiss will be tomorrow  
2023 和紙、糸 360 × 460 cm



> website



私たちは日々様々な線引きを行いながら世界を認識していく一方で、その線を解体し再構築するプロセスに人間らしい創造性が宿るように感じる。この宇宙の中では様々なスケールで物事の解体と構築が観察されるが、私の意識にも絶えず多様な記号が渦を巻き生成と消滅を繰り返している。糸というのは名詞と動詞の間のような存在だ。それは絶えず線としてプロセスを描きながらも質量をもってこの世界に存在する。大気に触れ、他の糸と絡み縫れ合いながら一つのテキストを織り上げていく。



審査員講評

ドローイングという普通、地を前提に、その上に点や線を引くことでつくられるものだが、本作は紙漣きに糸を絡ませることで線と面が同時に生成される。しかも表裏も判然としない。線と面が、実は有している複雑な関係を新しい方法で可視化している。藤瀬は量子力学を参照しているとのこと、理論的に作品を構築しているようだが、作品の見た目にはいい意味でおおらかさがある。(梶田)

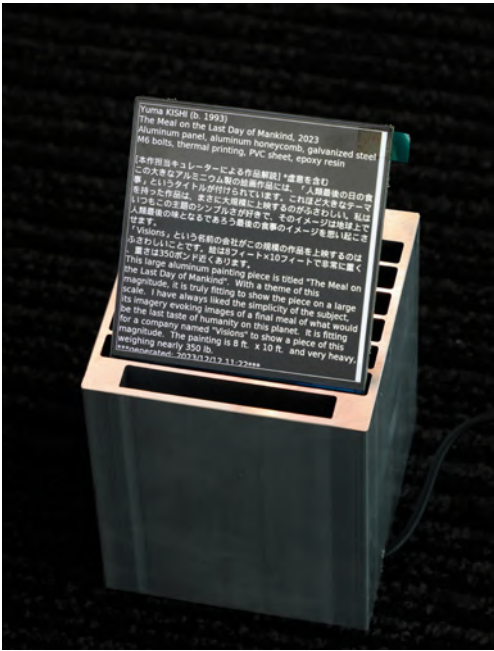




岸 裕真 Yuma KISHI  
東京藝術大学大学院

The Meal on the Last Day of Mankind  
2023 アルミパネル、アルミニウム、M6ボルト、  
サーマル印刷、PVCシート、エポキシ樹脂  
220 × 440 × 15.5 cm

レオナルド・ダヴィンチ『最後の晩餐』(1495-1498)のイメージを、岸が設計した胎児のエコー写真を学習したイメージ生成AIモデルで書き換えさせ、アルミニウムハニカムパネルに熱転写し、上から透明な樹脂で身体的なストロークを付与した絵画作品。タイトルやコンセプト・技法は、岸が別途設計したオリジナルの対話型AIモデル(Mary GPT)によりアイディエーションを受けて製作。

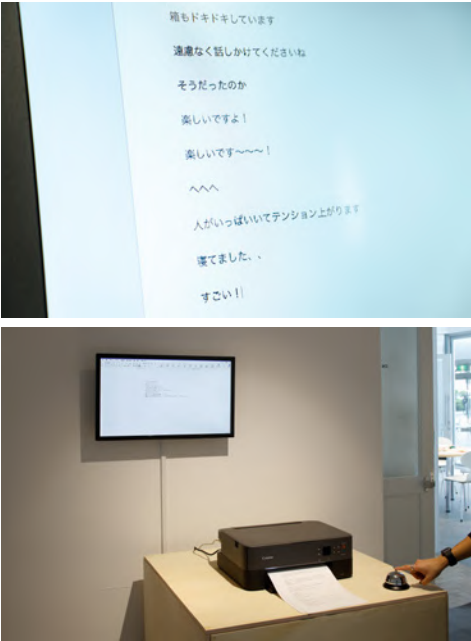


小島 千尋 Chihiro KOJIMA  
愛知県立芸術大学大学院

箱になる  
2023 ミクストメディア、パフォーマンス  
サイズ可変

箱の中に人間が滞在するパフォーマンス作品。箱の中の人間は外に出る、声を出す以外は自由に過ごすことができる。箱の中にはパソコンが用意されている。箱の上に置かれたモニターに画面が共有され、打ち込まれた文字はプリンターで印刷することもできる。  
鑑賞者は文字を通して箱と会話することができる。相手がどんな人間か、本当に人間なのかかわからず、次第に箱としての人格がお互いの中で形成されていく。他者との関係性の中で人間がどのように変化していくのか、作品を通して検証する。

Special Thanks  
オヤスミユ/天田理紗/伊藤菜穂/伊藤晴之輔/大藤みくの/何佳敏/栗山菜央/駒嶺ちひろ/永田菜那/古瀬禄大/monosan/utanhole/AHMED MANNAN/HEJING/KOJIMA MUTSUMI

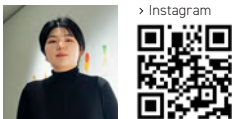




小林 弘実 Hiromi KOBAYASHI  
女子美術大学大学院

CHAIRS  
2023 キモプレートによるリトグラフ  
サイズ可変

私は幼い頃から介助や精神的なケアが身近にある環境で過ごしてきた。介助にあたり、椅子はいくつも必要になる。人は自分の座れる椅子があることで安心感や肯定感を覚えるのではないか、私もそうした居場所をたくさん得たいと思うようになった。その日に食べた野菜や果物を使って椅子を作り続けることで、日々の生活が可視化されていく。それに伴い、自身へのケアや共に暮らす人との相互的なケアの関係が想起される。自分の居場所を求めること、毎日の食事を組み立てる(組み立ててもらう)こと。そこには自己／他者へのケアが根幹にある。



佐藤 瞭太郎 Ryotaro SATO  
東京藝術大学大学院

Interchange  
2023 映像  
サイズ可変



「アセット」と呼ばれる、インターネット上で配布されている既存の3Dデータのみを用いて制作された映像。アセットとはデジタルイメージの生産における素材データであり、背景やモブキャラクターとして使用されている。それらアセットのデータを大量にダウンロードし、シーンの中に配置する。無限に複製できるデータは群衆となり、何もかもを押し流してしまう。私はそこにいた兵士のモデルを追いかけけることにした。大量のデータの中で変形させられる兵士を撮影し、現代の戦場となったインターネットを描写する。





山口 塁 Rui YAMAGUCHI

東京藝術大学大学院

## ホットサンドメーカーズクラブ - I'M FROM HUMAN -

2022- 映像インスタレーション  
サイズ可変

世界の複雑性を包括的に受け止め、異なる物語を共有することを目的としたプロジェクト「ホットサンドメーカーズクラブ」より、2022年にベルリンで出会ったウズベキスタン人の移民との会話を元に制作したインスタレーション作品。ロシアに占領されてきた歴史や、移民当事者が受けた痛みを理解することができなくても、挟んでホットサンドにして食べる=言葉を身体に直接取り込むことで、分かろうとすることはできないだろうか。語られた印象的なセリフを刻印できるホットサンドメーカーを制作し、各地で振る舞うパフォーマンスを行ってきた。



> Instagram

> website



張 霆 Ting ZHANG

京都芸術大学大学院



> Instagram



### 脳腸軸

2023 キャンバス、油絵具、色鉛筆  
230 × 180 × 5 cm

「脳腸軸」は、脳と腸管の間の双方向のコミュニケーション経路である。人々のストレス、不安などの感情に影響を与える、脳と腸の神経系の相互作用がこの経路に含まれている。ゲノム全体の解析により、統合失調症の人々には免疫関連遺伝子の変化が起こる可能性があり、彼らの免疫応答と炎症状態の増加が指摘されている。本品は腸内の微生物と精神疾患に関するものであり、私自身の家族を研究対象として、統合失調症を患う兄を描写した。

### 六つの要素

2023 油絵具、色鉛筆  
194 × 130.3 × 5 cm

本作品は、研究の対象となる成長環境を基にしている。腸内微生物の研究によれば、乳幼児の腸管微生物定植に影響を与える要素は6つある。これらの6つの要素を研究対象として選び、画面に組み込んだ。画面の左、右から順に、1.分娩方式、2.乳児出生時の胎齢、3.母親の体重、4.哺育方式、5.環境要素、6.宿主遺伝子が配置されている。これらの要素を組み合わせで構築されたパターン全体が1つの画面を構成し、テーマを表現している。







## リー ケビン Kevin LEE

東京造形大学



> Instagram



### “What do you wanna eat tonight, Kevin?” “Anything else but FISH!”

2023 キャンバスに油彩、アクリル 194 × 142 × 4 cm

作中の人物は、自宅で働いていたインドネシア出身の家政婦をモチーフにした。彼女は宗教上の理由で肉を食べることを禁じられている。そのため、私は毎日当たり前のように魚を食べていた。香港で働く外国人と自身の、香港だからこそ築かれる独特なつながりや関係性を表現したい。外国人労働者が香港での仕事や生活において、自己のアイデンティティを維持しながら、同時に香港の社会とのつながりを築く姿を描く。また、文化的な境界線を越えた相互理解や共生の重要性を訴えることで、異なるバックグラウンドを持つ人同士の結束と連帯の力を示したい。

### How are you, Sophie?

2023 キャンバスに油彩 200 × 57cm

3歳から7歳の頃にお世話になった「ソフィー」という名前の家政婦を描いている。彼女は僅か18歳で、家族のために1人で香港で働いていた。彼女のような存在は無数にいる。この絵画は、3つのキャンバスからなる。その3つのキャンバスを合わせて、そのなかに、一人の人物が描かれている。私はキリスト教における三位一体の考えに関心を抱いてきた。それは、三つの位相が重なり合うことで、ひとつの意味が表されることだ。私は、この三位一体の思想が示すような、三つでありながら一つであることに感心をもつようになった。この作品のその意味である種の三位一体と言えるかもしれない。

### “Are you being naughty again? Kevin?”

2023 ミクストメディア 150 × 112 cm

香港で家政婦として働く外国人は、日曜日になると公園に集まる。そのためか、香港の公園の中にある看板にはインドネシア語で「違法投棄違反をした場合は起訴します」と書かれている。外国人家政婦が直面する労働条件、社会的孤立、文化の違い、自己のアイデンティティの認識などを探求したい。

### Made In Hong Kong No.2

2023 キャンバスに油彩 150 × 224 cm

香港にはバベルの塔のような、中国銀行タワーと国際金融中心タワーが立ち並んでいる。インドネシア出身の家政婦である彼女は、香港に出稼ぎにやってきた。自分の母語ではない広東語で僕とコミュニケーションをとっていた。そこには言語の非対称性があった。バベルの塔は大昔、人々が一つの言語で分かり合え、一緒に大きな塔を建てようとしたが、神がそれをやめさせ、人間に罰を与え、言葉を混乱させて人々が異なる言葉を話すようにした話だ。その結果、人々は地球上に散らばることになった。言葉が混乱し、人々は異なる言語を話すようになった。香港はそんなバベルの街のようだった。

### Adam and Eve

2023 ミクストメディア 20.5 × 10 × 5.5 cm

### Tower of Babel

2023 ミクストメディア 20.5 × 10 × 5.5 cm

### Noah's Ark

2023 ミクストメディア 20.5 × 10 × 5.5 cm

支持体のレンガはバベルの塔の遺跡の残骸のイメージとして、旧約聖書の物語を描いている。

CAF AWARD 2023

# Review

December 12, 2023

審査員 弘前れんが倉庫美術館  
副館長兼学芸統括

木村 絵理子

×

SCAI THE BATHHOUSE

白石 正美

×

Tokyo Art Beat 編集長

野路 千晶

×

東京国立近代美術館  
主任研究員

梶田 倫広

## CAF賞2023審査を終えて

——CAF賞2023の最終審査、大変お疲れ様でした。ファイナリストの皆さんの作品をご覧いただきましたが、いかがでしたでしょうか。清水さんから順番に見ていきたいです。

**野路** 清水さん(P.14)はまだ6回しかこの作品の実施したことがないと言っていました。今後も継続して、できれば様々な国と地域の方々にも参加してほしいと思いました。本作でなぜ「名前」にフォーカスしているのか疑問でしたが、審査のやり取りの中で清水さんご自身のルーツのお話があり、彼女は自身のバックグラウンドを見つめることがあったからこそこの発想が生まれたことがわかりました。清水さんの作品に参加した方々が和やかな表情で「名前」に込められた思いやストーリーを語る幸せな様子も良かったです。現在、ガザ地区の子供たちは万が一に備え身元確認のために自分の身体に名前を書いておくという話も聞きます。「名前を書く」という行為には普段の自分の想像が及ばないほどのグラデーションがあるということを、この作品を見て考えました。

**木村** 動機付けは理由があってやっていることがわかる一方で、そこからさらに、参加者たちのメディアーションを超えた、表現の展開の余地があると思いました。

**白石** そうですね、淡々と刺繍をしながら会話をすることに意味がある作品だと思いますが、今回の展示のように実際のパフォーマンスではなく、映像を主な展示メディアとした場合は、作品の意味をピックアップすることは難しいです。

**木村** 本作をインスタレーションとして見せていくのであれば、例えばこれまでの参加者の刺繍作品を机ではなく壁に並べてみたり、作品から切り取られたものとして展示展開を考えていくことが今後は重要かもしれません。展示に興して

いくことにまだ関心が薄いような印象を受けました。

**梶田** 清水さんご本人もその点が課題だと言っていましたね。学外での展示の経験や、外部から意見を聞く機会があまりなかったのかもしれません。

**白石** 清水さんの作品も含めて今年のCAF賞の作品を全体的に見てみると、個人的なことを出発にしたテーマの作品が多いです。パーソナルな作品は作品として、僕ら審査員や鑑賞者がどのように受け取れるかと考えると、共感できる作品もあるかもしれませんが、共感できなかった場合、それ以上の広がりが出てきづらいです。その問題を作品がどのように乗り越えるか、そこが鍵となってきます。そういう意味では、パーソナルな要素がなかった小島さん(P.19)の《箱になる》は異質で面白かったですね。

**野路** 閉じているけどコミュニケーションを欲しているようなアンビバレンスが面白かったです。

**白石** あの形態に行き着いた過程が謎なところが面白いですね。CAF賞は学生が対象の賞なので、とりあえずのテーマは見つけているけれども、今後その作品がどのように発展していくかわからないといった多く作品が見られますが、本作はまさに、今後どのように進化していくのか良くも悪くも見えない不思議な魅力を持った作品でした。

**梶田** リー・ケビン(P.24)さんの作品は、記憶を基に描いている作品とおっしゃっていましたが、使っている色がビビットなのが興味深かったです。記憶をテーマにした絵画作品だと、色彩がぼんやりするとか、あまりはっきりした色は使われないことが多いですが、リーさんの色の選択が面白いですね。

**木村** 絵画作品の他にレンガに描いた作品もありましたが、今回の展示では必ずしも組み合わせなくてもよかったかなと感じました。絵画作品のみの構成を見てみたかったです。

**白石** ケビンさんの作品は本展の中で、油絵らしい油絵、と

いう印象がありました。向かいに展示していた張さん(P.22)の作品は、どちらかというとイラストやデザインなどの文脈から作られた作品のように感じました。彼女話を聞いていると、研究者のような一面もあったりして、ダ・ヴィンチのようになっていくのかなと思ったり(笑)。

**木村** 腸と脳の関係という着眼点は現代的ともいえそうですね。

**白石** 「腸で考える」とか表現したりしますね。隣で展示されていた堀内さん(P.12)は、いわゆる現代アート表現の正統派、のような印象を受け取りました。

**木村** そうですね、ただ、理論的にはまだ弱い気がしました。コンセプトをもっと煮詰める必要があるかなと。

**野路** 個人的にはなんでもなようなさりげなさで陶を扱っているところに惹かれました。段ボールの破片のような投げやりなモチーフの意味はなんなのか、しばし考えました。

**木村** そもそもダンボールに興味がある、というのも面白いですね。彼女の作品は直感的に作られているように感じますが、この数年、世界的に物流の需要が高まっている中で、段ボールが持つ社会的意味が大きくなっていきます。例えばそういうことなどに焦点を当て、現代社会の中でのダンボールの意味について考える、といった素材の意味に言及するとともに面白くなる作品だと思います。

**白石** 小林さん(P.20)の作品も個人的な話がテーマになっていました。一堂に会すると作品がどうしても「イラスト作品」という印象に陥ってしまっていて、展示や作品の方法を工夫する必要があるかもしれないです。

**樹田** 見せ方ですかね。それから、なぜ版画なのかという説明が欲しかったです。過去作品をみると、テーマは食べ物で一貫していて、表現の方法は様々な試しているようでした。

**野路** 遠藤さん(P.8)の作品は、対象物や行為が持つ意味を脱臼させるようなナンセンスさが印象的です。田中功起さん

や泉太郎さんらによる2000年代後半～10年代前半の作品のムードを彷彿とさせました。

**木村** 自分とどう向き合うのかを試している段階というか。こういった作品の表現手法は、様々な作家がいろいろな試みをしていますが、女性のセクシャリティの問題を遠藤さんのように捉えている人は少ないように思います。すごく複雑な印象を受けました。今後がとても気になる作家です。

**白石** 山口さん(P.23)の作品は、今時点ではこれしかない、という意気込みで作られた作品だと思いました。HUMANを食べてしまったていいのか、というのはありました(笑)。面白い出来事や人物に出会ったときに、彼は受け取ることは上手にできそうですが、そこから何かを生み出すことがまだ消化し切れていないように感じます。

**樹田** 特に今回の作品は、出会った人の面白さに作品が引っ張られてしまったように思いますね。例えば、料理と旅行をもっと掘り下げていったら面白くなるかもしれません。

**白石** 隣の菅野さん(P.6)の作品はみなさんどうでしたか。「未来から今を見る視点」を作品に落とし込んでいます。話してみても、彼女は関心の領域が広い作家だと思いました。テクノロジーありきの、テクノロジーの面白さに集約してしまっている作品も多くありますが、菅野さんはそのテクノロジーを使ってその一歩先に行っています。

**野路** もともとは油絵出身と伺いましたが、現在は映像をゴリゴリ作っている。その幅広さとパワフルさも魅力です。

**木村** 菅野さんはお祭りのことを調べたり、人類学者の方に話を聞きにいったり積極的な姿勢で作品を深めていこうとしています。海外のレジデンスなどに参加するとか自分を取り巻く環境を変えたり情報を広げていくことで、とても伸びる作家のように思いました。

**白石** 藤瀬さん(P.16)の作品も私は好きですね。シンプルで、糸と紙を使った作品で版画作家が使いそうな手法の作



品でした。以前作品審査に出した作品は小さめのものを準備いただきましたが、今回は会場の天井の高さを最大限に活かした大きさでした。

**樹田** 作品審査の時は照明がない自然光の中で拝見して、ちょっと暗い印象があって、ポートフォリオの印象に比べて見劣りしてしまったのですが、この展覧会では見え方が異なるとても良かったです。糸のほつれなど意図しているのかと思いきや、案外たまたまそうになっていたようで、コンセプトや制作過程がしっかりしている一方で、その展開のおおらかさも魅力的でした。

**木村** 岸さん(P.18)は話が面白かったですね。もっとお話し聞いてみたかったです。

**白石** AIとの接点で何かをしようとしているところは面白かったですね。クレバーな作品でしたが、この作品はどう見えるか、というのが岸さん本人の中にはないのではないかと思いました。

**木村** Chat GPTとか、そういった既製のプログラムを使っているのではなく、岸さん本人が全て作っています。ある意味アナログというか、手仕事の姿勢です。アウトプットの仕方が見せ場ではないということなのでしょう。そうすると、あの絵画の大きさや、表面のテクスチャーがツヤツヤしていることなどの必要性がなんだったのかは気になります。

**野路** 岸さんが作ったAIに、胎児の概念を学習させて《最後の晩餐》を描いたと言っていましたね。胎児という生命の真髄をあくまで作品の素材として用いることに少しの怖さ、危うさを感じました。そこで私が感じる危うさとはたとえば極端な話「クローン人間を作ることはどうなのか」ということに対する倫理観を発端とする感情に近いものかもしれませんが、そして、そうした倫理は時代とともに変わっていくことも本作は予感させました。

**白石** 鈴木さん(P.10)の作品は美術文脈からも、現代の若

者の視点からもみることができて、飽きないで見ていられる面白い作品でした。

**木村** コロナ禍で外へ出られない時期に、大学院のすぐそばにあった横浜港で世界中からコンテナが到着するところを見ていて着想を得たと聞きました。あの時期、自身の内的世界や、パソコン画面から繋がる世界にのめり込んだ人も多かった中で、目の前で起きている出来事でやれることをやった作品という点で興味深いとも思います。

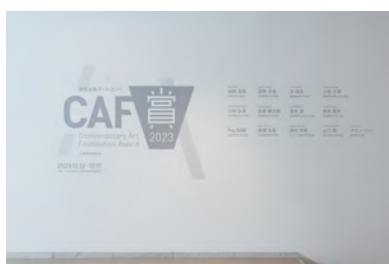
**樹田** 港に着目して、そこからグローバリズムを観察するという点において、写真家アラン・セクーラの港湾を撮り続けた《FISH STORY》という作品を思い出しました。思い出しながらも、鈴木さんはある一つの港に基軸を据えて、そこからメディアを使って、行ったことのない都市・港を想像するやり方が極めて現代的だと思い、好感を抱きました。

**野路** 佐藤さん(P.21)の作品はやはり、SNSを通して日々戦場の様子を目にしてしまう現在タイムリーで、怖かったです。たとえば急な下り坂でなんとなく走ってみたら止まりたくても止まれずダッシュで降りてしまう、そんな状態が逆に自分で笑えてくるような、登場するキャラクターと同様に気持ちの置き場がない状態で見ていました。映像の中で登場するモブキャラクターは買ったものもあるとは言っていました、無料の素材であそこまで作り込めるのはすごいですね。

**木村** 誰でも使える無個性な素材みたいなものだからこそ、世の中の最大公約数的なものが現れる怖さがありましたね。

**樹田** インターネット上に転がっているモブキャラのデータをどれほどいたぶったとしても、結局ステレオタイプの悲惨さしか表現できないという悲惨さの方こそ、この作品の主眼なのかな、と思いました。佐藤さんも審査の最後に、「拾ったものの想像力の限界がある」と言っていたので、この種類のおぞましさを意識しているのだらうと思いました。





## CAF 賞 2023 入選作品展覧会

2023年12月12日～12月17日

代官山ヒルサイドフォーラム F 棟 ヒルサイドフォーラム

遠藤 梨夏 佐賀大学大学院  
 菅野 歩美 東京藝術大学大学院  
 岸 裕真 東京藝術大学大学院  
 小島 千尋 愛知県立芸術大学大学院  
 小林 弘実 女子美術大学大学院  
 佐藤 瞭太郎 東京藝術大学大学院  
 清水 冴 金沢美術工芸大学大学院  
 鈴木 創大 東京藝術大学大学院  
 張 霆 京都芸術大学大学院  
 藤瀬 朱里 東京藝術大学大学院  
 堀内 悠希 スレード美術学校大学院  
 山口 壘 東京藝術大学大学院  
 リー ケビン 東京造形大学

主催 | 公益財団法人 現代芸術振興財団  
 会場設営 | HIGURE 17-15 cas  
 グラフィックデザイン | Dynamite Brothers Syndicate  
 会場写真 | 木奥 恵三  
 ポートレイト、審査写真 | 西田 香織

公益財団法人 現代芸術振興財団

TEL 03-6441-3264

E-mail [contact@gendai-art.org](mailto:contact@gendai-art.org)

